

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 根本夏美 年齢 13歳 職業・学校名 矢吹中

私は、東日本大震災を振り返ると、悲しい  
 思い出しかありません。当時の私は、小学二  
 年生で、学校から帰、てきて家でおやつを食  
 べていました。テレビを見ていた時、急に地  
 震注意報の文字が画面に出たのです。何だろ  
 うと思、ていると、いきなり家がゆれました  
 。すぐおさまるかと思、たら、どんどんゆれ  
 はひどくなり、家の家具や食器などが床に落  
 ちていきます。これは、やばいと思、私は  
 すぐ机の下に隠れました。弟とおばあちゃん  
 も私の後に続いて、机に隠れます。すると、  
 私達が机の下に入ったとたん、一番大きな家  
 具が机に向か、て落ちてきました。ちょっと  
 隠れるのが遅か、たらと思、うと今でもゾクゾ  
 クします。机の中で私はず、と泣きました。  
 お皿が割れる音がしたり、家具が落ちる音が  
 してとてもこわか、たです。もうこんな体験  
 はしたくないと強く思いました。でも、死な  
 ずにすんで、本当に良かったです。そして、  
 今後は地震がきた時の行動を考えたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 仁井田 葵 年齢 13 歳 職業・学校名 知岐中学校

それは突然やってきた。地面がうねりムカ  
 が入る。真直立で入れない。地震だ、  
 と気づくまでに数秒かか、た。体育館や校舎  
 から大きくさんの人が出てきた。当時小学生だ  
 った私からすれば地球が滅亡するかと思、た。  
 周りを見れば友達はおびえに並いてる。く  
 っをほきかえようとした人ほほだし。手には  
 えんがっを握。たまま。冷静にな、て考える  
 と恐怖がこみ上げてきた。

あの時から何年の月日が流れただろう。私  
 の町では地震がつけた跡はす、かり見え  
 なくな、た。あれからの生活は大変な、た。  
 水が出ないから満足な生活ができた、た。  
 当たり前がうばわれた数ヶ月。当たり前が当  
 たり前じゃ。付いた事を知、た。水がつかえて当  
 たり前。電気がつかえて当たり前。ご飯が食  
 べる事が当たり前。いつ、また、どこかで、  
 私達から当たり前が消えるかもしれない。た  
 から当たり前の日常を大切にしていこう。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 総陽太 年齢 13 歳 職業・学校名 知吹町立矢吹中学校

あの震災を思い出すと想像もつかない世界  
 でした。僕は、あのころは小学2年生でした。  
 ちょうど学校の日僕は、休んでいました。ち  
 よりどこかたつに僕は体を休めていました。え  
 して、その時はや、てきました。外に揺れ  
 始めだんたん大きくな、ていき僕はあまりの  
 恐怖で二たつから出れなくなり二たつに身を  
 隠しました。そして、揺れは止まり僕は外に  
 出ました。親は、私営業で理容室をや、て  
 いて家と店はくっついていました。店を見て  
 見ると、自分が今どこにいるか分からなく  
 らい荒れていました。そして、僕は店を一割  
 も早く取りもどしてほしいため家族みんなで  
 片づけました。本当にあの時は忘れません。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 薄井 紗花

年齢 12 歳

職業・学校名 矢吹中学校

私	が	、	一	番	印	象	深	く	覚	え	て	い	る	の	は	、	し	ば
ら	く	ぶ	に	あ	っ	た	祖	父	の	言	葉	だ	、	た				
「	ま	う	お	じ	い	ち	ゃ	ん	の	作	っ	た	し	い	た	け	は	す
ず	か	に	食	で	さ	せ	ら	れ	な	い	か	も	し	れ	な	い	な	ら
い	っ	も	、	し	い	た	け	自	ま	ん	を	聞	い	て	い	た	私	は
い	っ	か	に	な	く	弱	気	な	発	言	の	祖	父	に	い	っ	て	と
ん	ど	ん	と															
あ	る	し	か	な	か	っ	た	。										
一	祖	父	の	使	っ	た	原	木	し	い	た	け	は	、	と	て	も	肉
で	、	か	さ	が	ま	る	ま	る	し	て	い	っ	て	、	美	入	の	し
け	と	評	番	だ	ら	た	。											
◇																		
バ	タ	-	と	こ	し	ょ	う	で	焼	い	た	し	い	た	け	ス	テ	-
キ	か	、	私	の	大	好	物	だ	、	た								
福	島	の	山	は	放	射	能	で	、	汚	染	さ	れ	て	原	木	で	の
表	は	い	で	き	な	く	な	っ	た	。								
そ	の	目	を	境	に	、	祖	父	の	体	が	少	し	ず	っ	小	さ	く
な	る	の	を	感	ん	じ	い	た	。									
何	を	も	っ	て	復	興	と	い	う	の	か	私	に	は	、	分	か	り
ま	せ	ん	が	祖	父	の	笑	顔	が	戻	っ	て	元	気	に	し	い	た
表	は	い	か	で	き	る	こ	と	が	復	興	の	第	一	歩	だ	と	思
う																		
！																		

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 渡辺 祥篤

年齢 13 歳

職業・学校名 矢吹中学校

私はまた2年生の時でした。その日はへいほ  
 んでした震災が起きるまでは。その時は小さ  
 のゆれだとお思っていました。でもだんだ  
 んとゆれが大きくなりていきます。最初は少こ  
 しゆれならおわると思っていました。でも  
 長くゆれ杭がゆれつづけて杭がぶ。吹きとばさ  
 れそうおぐらいの、ゆれでした。いったん、  
 ゆれがおさまったから、外に出ました。学校  
 の中は物が色々な物が落ちていました。外に  
 出たら近の人たちも、学校にいました。外で  
 杭がくるまで、外でじっとまっていた。  
 家に帰ると、家の中は物がさんざん落ちてい  
 ました。スリッパをはいていました。ガラス  
 のはへんがありました。この東日本大震災を  
 体験し、今復興への想いはまだ心の中にあ  
 ります。今後進むべき未来は今までの福島県を  
 もと、いり福島にしたい。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 石川由依 年齢 13歳 職業・学校名 矢吹中学校

2	0	1	1	年	3	月	1	1	日	2	時	4	6	分	に	東	日	本	
大	震	災	が	お	き	ま	し	た	。	そ	の	時	私	は	小	学	校	2	年
生	で	。	教	室	で	帰	り	の	会	を	し	て	い	ま	し	た	。	地	震
が	お	き	た	時	。	最	初	は	み	ん	な	ふ	ざ	け	た	り	笑	っ	た
り	し	て	い	た	け	ど	。	だ	ん	だ	ん	大	き	く	な	。	て	ま	て
み	ん	は	不	安	に	な	り	。	机	の	下	に	急	い	で	は	い	り	ま
し	た	。	先	生	も	あ	わ	て	て	い	ま	し	た	。	地	震	が	お	き
ま	。	て	ま	て	校	内	放	送	で	外	に	避	難	す	る	よ	う	に	指
示	が	で	ま	し	た	。	外	に	避	難	す	る	と	小	さ	い	る	た	ち
が	泣	い	て	い	ま	し	た	。	私	も	友	達	の	顔	み	る	と	安	心
し	て	少	し	泣	い	て	し	ま	い	ま	し	た	。	外	に	い	る	間	も
余	震	が	た	く	さ	ん	ま	ま	し	た	。	家	の	近	く	の	マ	ン	ホ
ー	ル	が	と	び	出	て	い	て	び	。	く	り	し	ま	し	た	。	今	は
マ	ン	ホ	ー	ル	も	な	お	り	。	こ	わ	れ	た	道	路	も	ま	れ	い
い	な	お	っ	て	ま	ま	し	た	。	最	初	に	比	べ	た	ら	線	量	も
下	が	。	て	ま	て	ま	か	っ	た	と	思	い	ま	す	。	こ	れ	か	ら
も	っ	と	。	復	興	が	進	ん	で	県	外	に	避	難	し	た	人	た	ち
も	。	福	島	県	に	も	ど	。	て	ま	て	安	心	し	て	生	活	出	来
を	ら	い	い	と	思	い	ま	す	。										

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 森 拓真 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

東日本大震災があつたときに僕は、小学校  
 3年生のときでした。その日は、体調が悪く  
 て、学校を休んでいました。ちょうどテレビ  
 がついていて、テレビの地震速法の音や、携  
 帯電話が鳴り響いていて、その頃は、まだ小  
 さくて、とてもおくてすぐに、このつの中  
 にもぐりました。激しいゆれがしばらく続い  
 て、家の高い場所にあつたものが、どんどん  
 落ちこきて、とてもおかつたです。あれ以  
 来、地震速法の音になると、おどろいてしま  
 うようになつてしまいました。今でも東日本  
 には、あの大地震の影響があります。今は、  
 復興の途中ですが、これからの進み方により、  
 いい生活ができるようになつていくと思いま  
 す。これから、自分のできることは、でき  
 るだけ、取り組めるようにしたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 石川 海球 年齢 13 歳 職業・学校名 知沢中学校

私	が	し	ん	災	に	合	わ	せ	た	時	は	家	に	母	と	二	人	で	い		
ま	し	た	。	T	V	を	つ	け	て	い	た	ら	。	聞	い	た	こ	と	も		
ほ	い	音	が	な	。	て	。	ビ	ッ	ク	リ	し	ま	し	た	。	そ	れ	か		
ら	数	秒	に	。	と	ら	強	い	や	れ	が	来	て	あ	わ	て	て	外	に		
出	ま	し	た	。	そ	し	たら	近	所	の	家	の	か	わ	ら	は	下	に			
落	ち	て	し	ま	う	し	。	水	路	は	か	ん	ぼ	つ	し	て	水	が	出		
て	来	て	し	ま	っ	た	。	と	。	い	も	怖	か	っ	た	。	は	い	。		
そ	し	て	少	し	や	れ	が	お	さ	ま	。	と	か	ら	家	に	入	っ			
た	ら	ぐ	ち	や	ぐ	ち	や	で	足	も	手	も	つ	け	ま	う	が	あ	り		
ま	せ	ん	で	し	た	。	父	と	は	夕	方	に	な	っ	た	。	と	か	ら	連	ら
く	が	と	れ	ま	し	た	。														
私	は	そ	の	夜	に	T	V	の	ニ	ュ	ー	ス	で	見	に	他	の	地			
域	の	人	々	を	見	て	思	い	ま	し	た	。	早	く	見	っ	か	れ	ば		
い	い	な	。	手	伝	け	し	て	あ	げ	たい	な	。	今	の	私	に	は			
何	も	出	来	な	い	け	ど	。	医	者	と	わ	う	将	来	の	夢	を	現		
現	す	せ	ま	あ	。	成	し	て	医	者	に	な	っ	た	ら	小	さ	な	災		
害	で	も	大	ま	な	災	害	で	も	少	し	な	も	役	に	立	て	る	よ		
う	に	な	り	た	い	。															



「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 宮永 華帆

年齢 13 歳

職業

学校名 知中学校

東日本大震災、今年の3月から5年が過ぎま  
 うとしていますが、被害が大きかった地域は  
 完全復興には時間がかかります。ですが、私  
 たち中学生が力できることは限られています。  
 その中で私たちが力できることは地域を元気に  
 し、笑顔にすることだと私はこの震災を通じ  
 て感じました。悪いこともありましたが、貴  
 重な体験が、友達や家族との絆、助けしてくれ  
 たたくさんの方の大切さ。この体験を忘れず  
 私たちが出来ることは何かを考えるのがこれ  
 から生活していこうと思ひました。この日本、  
 そしてこの世界は、私達の子孫へと受け継が  
 れていきます。この震災でたくさんの方の  
 命がうばわれ、命の大切さを実感するものが  
 できました。この体験をこれからの中心とな  
 る人々に伝え、残していこうと思ひます。  
 この出来事は一生忘れたいではないもので  
 す。私はこれから未来へと向かって強く生  
 きていきたいです。

## 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 江連 愛珠 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

震災が起きた日、私は家でプリントの問題  
 を聞いていました。すると、テレビからいや  
 な音が鳴ってすぐに地震が起きました。外に  
 にげまじったが、出かけた母がなかなか帰って  
 こなかったのでもうあきらめました。ところが  
 地震が終わった後からは、原発が水素爆発し  
 た影響が来たり、スーパーで食べ物や飲み物  
 が来なくなったりして、本当に苦しい思いをし  
 ました。

今では、大体は大震災が起こる前と変わら  
 なくなっていると思います。でも、放射線はまだ  
 残っていて入れない地域があったり、早く定  
 計をつけたりしなければいけません。早く前  
 のように平和にすごしたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 大金皇貴 年齢 13 歳 職業・学校名 学生 矢吹中学校

僕が東日本大震災を体験したのは、二年生の三学期ころでした。外で友達と遊んでいる時に地震がきました。その時、僕は恐怖を体験しました。ずっとなんか立っていらねえ、周りの友達は泣いていたりしました。僕も怖くて、怖くてどうすればいいかわかりませんでした。また、家に帰ると時計やたなのものがすべて落ちていて、家の壁にはたくさん人のひびがありました。また、家がかたむいたのかとびらがうまく開け閉めできないことがありました。

これが僕の体験した恐怖です。

僕の復興への想いは二年生のころから変わらないうえものがあります。それは医者になるという夢です。テレビで大震災で被害を受けた人達を懸命に助ける医者を見て、僕も医者のように一人でも助けられるようにがんばりたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 岩谷 永遠 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

2	0	1	1	年	3	月	1	1	日	に	も	う	す	ぐ	楽	し	い	春		
休	み	が	待	っ	て	い	る	は	ず	だ	っ	た	の	で	す	が	東	日	本	
大	震	災	が	起	き	ま	し	た	。	矢	吹	町	の	方	は	海	な	ど	が	
な	い	の	で	海	波	の	心	配	は	な	か	っ	た	の	で	僕	は	あ	ま	
り	が	ひ	ら	な	か	っ	た	け	ど	。	こ	れ	ほ	ど	大	き	な	地	震	
を	体	験	し	た	の	は	は	じ	め	て	た	っ	た	の	で	ビ	ッ	ク	ワ	リ
は	し	た	。	校	舎	の	窓	が	割	れ	て	け	が	を	し	て	い	る	人	
も	い	ま	し	た	。	全	員	で	校	庭	に	集	合	し	て	親	の	お	か	
え	を	待	ち	ま	し	た	。	地	震	の	せ	い	で	放	射	線	が	放	出	
さ	れ	て	か	ら	ス	バ	ッ	チ	を	つ	け	る	よ	う	に	な	っ	て	し	
ま	い	ま	し	た	。	そ	の	か	ら	ス	バ	ッ	チ	は	今	も	つ	け	て	
い	て	「	い	っ	ま	て	つ	け	て	い	れ	ば	」	い	い	の	か	な	」	と
思	う	と	き	も	あ	り	ま	す	。	な	の	で	原	発	を	も	っ	と	補	
強	し	て	地	震	か	ら	守	れ	れ	ば	」	い	い	な	と	思	っ	ま	し	た

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 近内龍介

年齢 13 歳

職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

3月11日、2時46分、僕がけいけんした事がないような、地しんが襲った。その時、僕は二年だった。学校がおわり、僕がそろばんのゆくにいしました。最初は、友達と遊んでいたから、ちかくの家が人が急いで、家の中から出てきて、僕達を和ひ広い所へ回りました。すると、大きな、ゆれのじしんがおそいました。すごく長い間続きました。車は、すごくゆれて家のあらが落ちていました。その地しんがようやくおさまり、周りを見たら、道は、こわれて、さうきとは、変っていました。親がおかにきて、家に帰ったにテレビをつけらすごく事になっていました。水も出ない、電気も使えなくなるとすごくこまりました。今でも、復興のあそ業をしているのがすごくと思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 高橋孝太

年齢 13歳

職業・学校名 矢吹中学校

2011年3月11日、僕は東日本大震災を経験した。そして、東北の人々は大きな被害を受けた。多くの人々が亡くなり、建物がこわれ、たくさんの人々の心に傷をつけた。

震災から5年がたとうとしているが、まだ震災の傷跡はまだ消えてはいない。一部の人は、復興に向けて努力をしているがまだ多くの方は、自分のやるべきことが分からず何もしていない。しかし、今、僕らにできることは、多くの人々の震災で傷ついた心を、やすこことや、ボランティアに自ら参加して少しでも復興の支援をすることだと思う。

日本は、地震の多い国だから、しかならないことだから、その後にはどうするか問題だと思う。これからは、みんなで協力して少しでも早く今まで通り生活できるようにしていきたいと思う。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 丹内 紘一

年齢 12歳

職業・学校名 矢吹中

ぼくはしんすいののとま学校にいてかえるよ  
 ういをしていました。そしてとつせおまおま  
 まおまじしんがおこりました。ぼくはとてま  
 くりしました。みんな学校のこうていにお  
 まりました。そしてぼくのおか士人がおかえ  
 に来てくれました。そしてかえるときにぼか  
 の人のいえのねんかのかべがたおまていまし  
 た。でもぼくのいえはふいたたからまんしん  
 しました。そしていえにかえてもしんをりしん  
 ど4ねとめつたのじしんが2日ぐらいつま  
 ました。とてまはくていえがこまてしま  
 らかもしれおいとおもりました。でもしん士  
 いかおままでいえはたえてくれました。し  
 ていえじりらのものがたく士んをたおれたから  
 かたすけのがたいんてした。でもみんな  
 おまおまじいちんおまおまけんまけかんとつ  
 まなくとてまおんしんしました。  
 ぼくはもうこういうことはおまてほしくおま  
 とおもりました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 野崎七海

年齢 13 歳

職業・学校名 矢吹中学校

3月11日僕は、三神小学校で帰りの会をして  
 きました。友達と話ししていゝと気付くか気付  
 かないかぐらいの地震がありました。最初は  
 あ、小さな地震がなっうまなくらいしか思  
 ったくて、そのうちに机が大きくなり始め  
 たのでち。地震がぶせ来り校庭の上たへも  
 年生みんなが集ま、てみんな帰ることになり  
 ました。帰る時家族が迎えに来れなくて、僕  
 達前班の班長が「迎えが来れないなら乗せて  
 行ってあげるよ」と言ってくれたのでち。こ  
 の時僕は、助け合っつてこらうことなの  
 がと分かりました。



「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 平山 遙斗 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

あの東日本大震災が	もうすぐで五年たが
ます。僕が住む矢吹町は地震の前と同じ日常を	
とりもどすことができませんでした。	
当時僕は小学三年生でした。いつもと同じ	
ように下校しようとしたら、あの恐ろしい体	
験をしました。震災当時は家が崩壊したり道	
路にひびが入ったり、水や電気が使えなくな	
ったりして大変でした。放射線のせいで外を	
遊べなくてとてもたいていづでした。いち余震	
がくると分かつたおひえをかり暮らす日々で	
した。	
矢吹町には今、復興住宅が建設されておひ	
故郷に帰れない人達がたくさんいます。まだ	
復興してない町があるのだと思うと悲しい	
気持ちになります。一刻も早く放射線量が少	
なくなる、で故郷で幸せに暮らしてほしいです。	
多くの人達が被災して、多くの人達の命が	
奪われたあの体験を僕は一生忘れないと思ひ	
ます。	

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 横澤 智希 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹町立 矢吹中学校

僕はあの3月11日、小学校の校庭にいました。皆とおにごっこをして遊んでいる時でした。小さなゆれを感じ、「あー地震だな」と思い、なにした事もないなと考えていました。すると、とっぜんとてつもなく大きなゆれを感じました。

いままでになかった、大きな地震だったのだ。びびりしました。プールの水がとびだし、鉄棒がゆれていました。

この地震で何千人、何万人とまじせいができています。今考えたら、何も努力ができませんでした。自分がかくやしいです。

でも、命の大切さをあらためて知ることができました。悲しいでき事でもあり、命を奪ってくれた地震でした。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

## 匿名希望

僕は東日本大震災の時は、小学2年生でした。
 丁度学校帰りのバスに乗っていた僕は、
 ものすごい横ゆれに恐怖でふるえあがって、
 たことを思い出します。その後、放射能のこ
 とを心配した母は、父の実家のある栃木県に
 転校をするために引越しました。新しい小
 学校では福島県の人だという差別を受けな
 いで仲良くすることができて良かったです。今
 日は、放射線の数値も低くなり何不自由なく
 生活してります。あれからもう5年も過ぎま
 した。町も新しくなり震災の爪痕はほとんど
 見られません。当時は校庭にも出られず外出
 もままならなかった生活がうそのように感じ
 られます。僕たちはこの様に不自由なく日常
 生活を送ることができていますが、まだ現在
 も仮設住宅に住み、不便な生活を強いられ
 ている人達がたくさんいることを忘れてはいけ
 ないと思います。すべての人がまた、もと通
 りの生活へ戻ることができるよう心から祈
 りたいと思います。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

## 匿名希望

平	成	23	年	3	月	11	日	、	今	ま	で	体	験	し	た	事	の	な		
い	大	き	な	揺	れ	か	何	分	も	続	き	ま	し	た	。	一	体	何	か	
起	き	た	ん	だ	ろ	う	。	ど	う	な	。	と	し	ま	う	ん	だ	ろ	う	
と	こ	も	怖	か	、	た	ど	す	。	家	の	中	は	、	タ	ン	ス	が	倒	
れ	た	り	、	物	か	お	ち	た	り	し	ま	し	た	。	だ	け	ど	下	し	
ヒ	を	見	た	ら	津	波	で	家	や	車	が	流	さ	れ	て	い	て	大	変	
な	災	害	が	起	き	た	ん	だ	と	思	い	ま	し	た	。	水	も	出	な	
い	。	お	店	に	食	料	品	も	無	い	。	カ	ン	リ	ン	を	入	れ	る	
の	に	五	時	間	位	並	び	ま	し	た	。	昔	段	あ	た	り	前	の	事	
が	あ	た	り	前	に	出	来	な	く	な	る	事	が	ど	ん	な	に	大	変	
で	、	あ	た	り	前	が	ど	ん	な	に	大	切	な	事	な	の	か	を	考	
え	せ	せ	ら	れ	ま	し	た	。	あ	の	時	の	事	は	決	し	て	忘	れ	
る	事	は	あ	り	ま	せ	ん	。												
僕	の	生	活	は	地	震	の	前	の	様	に	戻	っ	た	け	ど	、	ま	た	
仮	設	住	宅	に	住	ん	で	不	便	な	生	活	を	し	て	い	る	人	達	
が	沢	山	い	ま	す	。	復	興	が	ま	た	ま	た	遅	れ	て	い	る	と	
思	い	ま	す	。	な	の	で	今	自	分	が	出	来	る	事	か	ら	積	極	
的	に	取	り	組	ん	で	復	興	の	役	に	立	ち	た	ら	い	と	思	い	ま
す	。																			

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 星 健斗 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹町立 知吹中学校

ぼくは、あの東日本大震災のとき本校中の  
 スクーターバスの中でした。いつものように走  
 っていたら、いきなり運転士さんがバスを止  
 めました。そのとたん強いゆれにおそわれま  
 した。バスがたおれてしまうと思、たぐりい  
 でした。周りのマンホールは、とび出してい  
 ました。ゆれがおさまると、バスに乗って  
 た、三年生などが泣いていました。それから  
 バスは学校に戻りました。しかしまだそのこ  
 ろ小学二年生だったのになにかなんたかおれか  
 りませ人でした。家族が僕を向かいに来て、  
 家に帰りテレビを見ると東北沿岸部では、大  
 きな津波がおきている事がわかりました。ま  
 た、その次の日今度は福島原子力発電所が爆  
 発など、この震災でいろいろな物をうじなって  
 しま、た人やあらためて命の大切を感じられ  
 た人もいます。

よってこの震災は、人の命の大切さをあら  
 ためて感じました。

## 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 村上 凌 年齢 13 歳 職業・学校名 矢次町立矢次中学校

僕	は	、	2	0	1	1	年	3	月	1	1	日	の	と	き	は	、	小	学	
2	年	生	で	し	た	。	あ	の	と	き	は	、	帰	り	の	会	が	丁	度	
終	わ	る	こ	ろ	で	し	た	。	そ	し	て	、	2	時	4	6	分	に	地	震
が	起	き	ま	し	た	。	僕	た	ち	は	、	担	任	の	先	生	の	指	示	
で	、	机	の	下	に	隠	れ	ま	し	た	。	僕	は	、	一	番	後	り	の	
席	だ	。	た	の	で	、	教	室	の	後	ろ	に	あ	る	ロ	ッ	カ	ー	が	
ら	、	本	ヤ	フ	ァ	ィ	ル	な	び	が	落	ち	て	く	る	の	が	よ	く	
見	え	ま	し	た	。	少	し	時	間	が	経	っ	て	か	ら	、	放	送	が	
入	っ	て	、	外	に	逃	が	る	よ	う	に	言	わ	れ	て	、	外	に	逃	
げ	た	け	れ	ば	、	ま	だ	地	面	が	ゆ	れ	て	い	ま	し	た	。	僕	
は	、	あ	の	と	き	の	怖	さ	が	忘	れ	ら	れ	ま	せ	ん	。			
こ	れ	か	ら	、	福	島	や	東	北	は	、	い	ろ	早	く	復	興	が		
進	ん	で	、	大	変	な	思	い	を	し	て	い	る	人	が	い	な	く	な	
る	よ	う	に	な	っ	て	ほ	し	い	で	す	。	さ	ら	に	、	原	子	力	
発	電	所	の	事	故	で	、	観	光	客	が	減	っ	て	し	ま	っ	た	け	
れ	ど	、	事	故	の	前	の	よ	う	に	、	観	光	客	が	た	く	さ	ん	
来	る	よ	う	な	、	魅	力	で	あ	ら	れ	る	よ	う	な	福	島	、	東	
北	に	な	っ	て	ほ	し	い	で	す	。										
僕	は	、	東	日	本	大	震	災	を	教	訓	と	し	て	、	今	度	起		
こ	の	災	害	に	対	応	で	き	る	よ	う	に	し	た	い	で	す	。		

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 山野辺 幸太 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

東	日	本	大	震	災	が	起	き	た	の	は	、	ほ	く	が	小	学	2	
年	生	の	時	で	し	た	。	ほ	く	は	家	に	い	て	い	つ	も	通	り
過	ご	し	て	い	ま	し	た	。	で	も	、	突	然	大	き	な	地	震	が
ほ	く	達	を	襲	い	ま	し	た	。	長	い	時	間	大	き	い	揺	れ	が
続	き	、	や	、	と	止	ま	り	ま	し	た	。							
家	の	中	や	テ	レ	ビ	ジ	を	見	る	と	地	震	が	残	し	た	大	き
な	影	響	が	分	か	り	ま	し	た	。	水	が	出	な	く	な	り	、	物
が	床	に	散	ら	か	、	て	い	た	り	、	思	い	に	も	よ	ら	な	い
光	景	が	あ	り	ま	し	た	。											
そ	の	日	か	ら	し	ば	ら	く	は	余	震	が	続	い	た	り	、	給	
水	車	へ	水	を	く	み	に	行	、	た	り	、	学	校	の	友	達	と	も
会	え	ず	大	変	、	そ	し	て	辛	い	日	々	を	当	時	は	過	ご	し
て	い	ま	し	た	。	ま	た	、	地	震	の	怖	さ	と	隣	り	合	わ	せ
で	生	活	し	て	い	ま	し	た	。										
今	で	も	、	放	射	能	、	原	発	な	ど	地	震	で	の	傷	跡	が	
多	く	残	っ	て	い	ま	す	。	こ	の	よ	う	な	傷	跡	を	国	、	県
の	人	に	は	い	ち	早	く	復	興	を	す	る	こ	と	が	で	き	る	よ
う	に	し	て	い	っ	て	も	ら	い	た	い	て	す	。					

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 安生 真奈美 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

2011年3月11日におきた東日本大震災からもうすぐ5年になろうとしています。そのときは、小学3年生だ、た私も、もう中学生になりましたが、今でもあの時の怖さは覚えています。学校から帰り家に入。てから5分後ぐらいのことでした。小さなゆれからだんだん大きくなりテーブルの下に隠れた瞬間に棚の上の物が落ち、食器棚やテレビが倒れてきて念のままだんでしまうのではないかと思いました。でも、良かったのはお母さんがたまたま早く帰。て来ていたことです。

私のおばあちゃんには富岡町に住んでいました。避難して無事でしたが、原発の近くなのでもう二度と帰ることが出来ません。家はどくな。たかと考えているおばあちゃんを見る時私も悲しくなります。少しずつ帰還困難区域が解除されてきているようですが、実際に帰れる人はまだまだ少ないので、除染をもっと進めて欲しいのと、一日でも早く帰りたいと思う人達が帰れる環境にな。てほしいです。

(20文字 × 20行)



「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 熊田知博 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

3月11日。その日はいつも通りの普通の日

だった。

しかし、その時私は小学2年生で、帰りの

会をやっていた。日直が「さようなら」

と言った瞬間、起きてしまったのです。あの

大地震が一。

先生達が放送や指示で生徒を避難させてい

ます。私は恐怖のあまりどうしていいのか分

かりませんでした。友達と並みながら避難し

ました。あの時のことは今でも、きりと覚

えています。

私はそれ以来、福島県を大事に思うようにな

りました。今は、中学生です。将来は、子

供達に東日本大震災を伝えていきたいと思

います。私の将来の夢は教師になることです。

仕事を生かして、伝えていければいいと思

っています。

## 震災を経験した今

私は、あの忘れられない大震災のとき、小  
 学校2年生でした。丁度帰りの会の最中で、  
 帰りのあいさつをしようとしたそのとたん、  
 アニメで見ようが揺れが私たちをお尻に  
 のびた。でもそれは一瞬の事でその後何度  
 も余震が続く一方でした。しかも私が家に帰  
 った時壁は落ちてる食器は割れてもう本当  
 にひどかった。今では色んな家がリフォーム  
 され、建てかわり、復興が進んでいまあ  
 が、あんな悲劇はもう二度と見たくはないし、  
 あんな事はあってはいけないと思います。で  
 もふせげる事ではないので、防災グッズなど  
 の用意を心がけていきたいです。また、避難  
 訓練を続け重ね、一人でも多く助かる鼻をつ  
 くれるのが理想だと思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 丸藤 奏海 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

私は二年生の三学期、東日本大震災を経験  
 しました。その時はとつぜんゆれ、とてもこ  
 わかったです。この経験で私は災害に備える  
 ようになりました。

福島県は復興が東北の他の県よりは進んで  
 います。私が岩手に旅行に行、た時、海のほ  
 うに行くと言われていて何もありませんでし  
 た。だから他の県とも、と助け合、たほうが  
 東北の復興が進むと思います。

未来では、震災の復興が進み、震災前以上  
 に福島県が発展することを願っています。そ  
 のためには、自分たちも復興に協力すべきだ  
 と思います。これからは未来にむけて、福島  
 にも、と貢献していければ良いと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への願い」麻葉用紙

## 匿名希望

私は、大震災がおきた時は、ばあちゃんの家

は心と子及人もお母さんにもばあちゃんがおきた

ました。

地震がおきた時は、とてもひび、くりして、す

ぐに外へ出ました。

外に出た時に近くの建物がくずれたので、こ

ろが、たてです。

地震がおさまった後、私は家に帰りました。

ドアを開けたら、棚や食器棚、タンスがたお

れていさ時間、とてもひび、くりしましたか、

片付けもたいへんでした。

今では、公園で遊べるようになってきたり、

こわれた建物も直ってききました。

なので、もう大震災は、おきてほしくないな

と思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 堀田 幸悠 年齢 13 歳 職業・学校名 天吹中学校

平成28年3月11日に東日本大震災がおこりました。その時に私は学校に居残りをしていました。震災は、とっ然おこりました。最初は小さなゆれでしたので机の下にかくれていました。少しゆれがおさまったのかと思うと、また大きくなり、教室の放送机が倒れたので、私はすぐに教室を出て廊下を走り階段を下りて外に出ました。外に出ると思っていた人々や他の居残りしていた人達がたたく声がありました。そして、しばらくすると、他のお母さん達も来ました。私も、少ししたら、お母さんが来て、3世余震のある中家へ戻りました。家に帰ると血も汗もほとんど全部がたおれていてショックでした。何日もかか、戻りにけしたのですが、血はかわれて、水もとまらなくなりました。そして私は、こう考えました。福島もその他も尊い命がたなくなりました。震災は勝てないけれど、今は何かあってお前へ進むハズなのだと、思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

匿名希望

私は、2011年3月11日東日本大震災を  
 体験しました。最初は、何かあったのかわ  
 からなかつたので、パニックになつたし、正  
 直こわかつたです。理由は、今まで体験して  
 いたことがありません。数日たつてテレビを  
 かけてみると、つなみ被害人がつたことがニ  
 ュースになつていました。それを見て私は、矢  
 吹では、そんな大変なことはあつていない  
 のに他の県では、こんなことがあつていた  
 んだとひびくりました。復興への想いは、  
 早くもこの福島県にもこれのように、なつて  
 ほしいなと思つていました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 中野 瑠子

年齢 13 歳

職業

学校名 矢吹中学校

私が、東日本大震災を経験したときはまだ  
 小学校三年生でした。そのころの私は、地震  
 が起きた後の原発事故がなんなのかよく分か  
 らずお父さんやお母さんによく聞いていまし  
 ました。それによると、その原発は、福島県のも  
 のではなく東京都のもので、震災による地震に  
 水素爆発が起き放射線が福島県内におおまか福島  
 県内をめぐりまわりました。その影響で、福島の浜  
 通りの地区などがきせいで自分の家に帰  
 ることができなくなりました。人が増加したその  
 中、お父さんが、生活が不自由になり大変なよう  
 です。しかし、お年寄りの方々などが仲良く  
 なり絆が深まるという良い点もありました。  
 そんなことがありながら、六年がたった今  
 も私はこの東日本大震災の被災者として、け  
 っして忘れることがありません。そしてこれ  
 から福島県の復興が早まるように、自分が  
 できることを考えながら生活していきたいと  
 思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 野崎 美菜音 年齢 12 歳 職業・学校名 矢吹町立 矢吹中学校

東日本大震災があったあの時、私は学校に  
 いました。急に地震がきて、みんな机の下に  
 入ると、色々な物が落ちる音が聞こえました。  
 ゆれがおさまると、すぐに下校になりました。  
 私が家に帰ると、親せきが何人かいて、母に  
 聞くと、かわらかたくさん落ちて、家の中も  
 あぶないので、私の家にとまることになった  
 そうです。矢吹町は、水が出ませんでした。  
 そんな時に、その親せきの人から自分の家のい  
 どころから、たくさんのお水を持ってきてしてくれまし  
 ました。私は思いました。こんな時に「みんな  
 で支え合、て助け合う」ことができたことが  
 とても嬉しかった。自分だけのことを考え  
 自己中心的にならずに、みんなのことを考え  
 ることができた福島県は、早く復興できると  
 思います。それでも、完全なる復興はいつに  
 なるか分かりません。1日でも早く福島県が  
 復興することを心から願っています。



「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 野崎雪乃 年齢 13歳 職業・学校名 矢吹中学校

東日本大震災が起こったその日、私は学校  
が早く終わり、塾にいた。地震が起きたとき  
は、今まで体験したことのない揺れに襲われ  
た。二年生だった私には、なにか起きたのか  
よく理解できなかった。

今は、中学生になり、東日本大震災につい  
て少しは理解できていると思う。私の住んで  
いる地域は、被害は小さく、水道が止まった  
くらいだった。しかし、沿岸部では津波がき  
てたくさんの方が亡くなったことを知った。

生きてくても生きることができなかつた人が  
いる、帰る場所を失った人がいる、そう思う  
ととても悲しかった。それと同時に、毎日当  
たり前に学校に行き、ご飯を食べて、笑っ  
ていられる自分はなんて幸せな人だろうと思  
った。今でも被災地は、震災当時の爪跡がま  
だ残っていてかれきもたくさんある。だから  
私がもう少し大きくなったら、少しでも震災  
前の福島に戻るように、笑顔であいられるよう  
にボランティアなどに積極的に参加したい。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 星 有紗 年齢 12 歳 職業・学校名 矢吹町立矢吹中学校

私は、震災の日の次の日は！家にいました。

その時は、道が地震のせいで地割れして行か

り、ゴミボールが飛び出していて、外出する

にはまだ危ないので、外には出れませんでした。

家には井戸水で水もあったし、電気も通

っていたので生活する分には問題ありません

でしたが、家には非常食が少なかったので、

食料が少々心配でした。けれどそんな時に、

私の父の友達が、富山からおざおざ来て、食

料や日用品などを持ってきてくれました。まだ

復旧作業が完全に終わってない中、心配して

来てくださったことには、本当に感謝してい

ます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 堀井 麻央 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

私	は	3	月	11	日	の	2	時	46	分	起	き	た	東	日	本	大	震			
災	の	時	家	で	り	人	で	い	ま	し	た	。	そ	の	時	テ	レ	ビ	ジ	が	
ら	聞	い	た	事	の	無	い	い	や	な	音	と	と	も	に	激	し	い	揺	れ	
れ	が	襲	っ	て	き	ま	し	た	。	私	は	慌	き	で	テ	ー	ブ	ル	の		
下	に	隠	れ	ま	し	た	。	棚	か	ら	皿	が	落	ち	て	は	て	割	れ		
る	音	や	家	具	が	た	お	れ	る	の	も	不	安	な	気	持	ち	で	見		
て	い	ま	し	た	。	あ	る	程	度	揺	れ	が	お	さ	ま	っ	た	か	テ		
ブ	ル	の	下	か	ら	出	て	部	屋	が	ど	う	な	っ	て	し	ま	。			
た	の	か	確	認	し	て	。	親	に	電	話	を	し	ま	し	た	。	け	ど		
電	話	は	通	か	ら	な	く	て	心	配	で	し	た	。	私	は	激	し	い		
長	い	揺	れ	に	恐	怖	感	っ	た	事	を	今	で	も	覚	え	て	い	ま		
す	。																				
こ	の	後	放	射	能	や	壊	れ	た	建	物	も	直	す	事	が	問	題	真		
に	な	り	ま	し	た	。	放	射	能	で	外	へ	行	き	に	く	く	な	っ		
た	り	学	校	が	休	み	に	な	っ	て	し	ま	。	た	り	し	て	し	ま	い	
た	。	今	で	も	道	路	が	ま	だ	で	こ	ぼ	こ	で	車	で	走	り	に		
く	か	っ	た	り	建	物	が	壊	れ	た	ま	ま	残	っ	て	い	ら	復	興		
が	お	く	れ	て	し	ま	っ	て	い	る	所	が	あ	る	の	で	少	し	で		
も	早	く	復	興	へ	と	進	め	る	よ	う	に	原	則	っ	て	い	ま	す	。	

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 向井 彩 年齢 12 歳 職業・学校名 知床町立知床中学校

東	日	本	大	震	災	か	ら	今	年	で	5	年	に	な	り	ま	す	。		
復	興	は	進	ん	で	い	ま	す	が	、	ま	た	故	射	線	の	影	響	で	
ひ	た	ん	し	て	い	る	人	達	が	た	く	さ	ん	い	ま	す	。			
あ	の	時	私	は	2	年	生	で	し	た	。	何	が	起	き	た	か	分		
か	ら	お	し	ら	い	て	い	た	事	を	覚	え	て	い	ま	す	。	そ	の	存
家	に	帰	る	と	足	の	跡	み	場	も	な	い	ほ	ど	物	が	た	お	れ	
て	い	ま	し	た	。	お	し	ん	も	お	わ	か	、	た	の	で	そ	の	日	
は	小	学	校	の	体	育	館	が	解	散	さ	れ	て	い	た	の	で	そ	こ	
に	お	る	こ	と	に	し	ま	し	た	。	体	育	館	で	は	お	に	ぎ	り	
ゆ	お	茶	を	配	っ	て	も	ら	い	ま	し	た	。	地	震	が	起	き	た	
時	は	コ	ニ	ビ	ニ	も	物	が	た	お	れ	て	買	え	な	い	状	況	だ	
。	た	の	で	配	っ	て	も	ら	え	た	こ	と	が	と	て	も	ウ	れ	し	
か	、	た	で	す	。	私	は	こ	の	震	災	で	毎	日	ご	は	ん	が	食	
べ	れ	る	こ	と	、	お	ふ	ろ	に	は	い	れ	る	こ	と	お	べ	て	が	
当	た	り	前	で	は	な	い	と	い	う	こ	と	が	と	て	も	臭	感	で	
き	ま	し	た	。																
私	は	ま	た	こ	の	上	り	の	地	震	が	あ	っ	た	と	し	た	ら		
ひ	た	ん	所	な	ど	で	役	に	立	て	る	よ	う	に	し	た	い	で	す	

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 吉成 葉南

年齢 13 歳

職業・学校名 矢吹中学校

私はこの東日本大震災で恐怖と原発の怖さ  
について知りました。

私は地震が来た時には家にいました。家に  
いると私は小さなゆれを感じました。ゆれは  
どんどん大きくなり、恐怖でテーブルの下に  
もぐりました。7分くらいゆれは続き外にい  
なんしました。車もゆれがひどく電線は危な  
かったです。それから私は地震におびえる毎  
日でした。今でもいつくるんだらうと、とて  
も心配です。

次に原発についてです。地震がきてから原  
子力発電所は爆発し、放射能の影響で外に出  
分けませんでした。町では豚汁やおにぎりを  
配っていただきました。水道水やトイレの水なども  
出なくなり、町の文化センターに給水車がきて  
水を配っていただきました。

この事から私は地震の怖さを知り、そして  
原発で起きた放射能をおびると病気になること  
いふ事も知りいろいろな事がわかることか  
で手手しました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 荒井 颯太 年齢 13歳 職業・学校名 矢吹中学校

ぼくは、2年生のときに東日本大震災を経験しました。少し前までは南相馬市に住んでいたのですが、矢吹町に引っ越ししていなかつたらとても危険でした。引っ越ししてきてよかったなと思いました。大震災がもたらした被害は、見るだけでも分かりました。とてもひどかったです。学校の中は又チャクチャ、下校中に見た家なども、庭に色々な物が散らばっていました。そして家に帰ってみると、皿は厚紙全部おきてて、水も浴場からもらってくるようになったとさでした。ぼくはこの経験から、自然災害のもたらす被害はとんでもないということも、身をもって、この時に感じました。家には非常用の道具などを置いていなかったので、準備しとこうと思いました。今は、もう震災からかなり復興していて、すごいなと思います。このまま、震災前より良い町になっていったらいいなと思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 有松 奈哉

年齢 12 歳

職業

学校名

矢吹中学校

ぼくは、東日本大震災を経験して、とても  
 怖か、たひす。当時、ぼくは、2年生でした。  
 家は帰、たら、棚やロッカーから、色々なも  
 のがたたくさん倒れていて、幼なか、たぼくに  
 には、当時の状況を理解することがひきなか  
 、たと思ひます。その中でも、特に印象に残  
 、たことが、水が出なか、たことです。水が  
 なりということ、トイレやお風呂に入れま  
 せんし、何よりもご飯がたけなか、たのでく  
 ても大変だ、たと思ひます。今は、ほとん  
 と元の状態に戻りましたが、当時の経験から、  
 震災がとても怖いということが分かりました。  
 ぼくは、原発や津波被害にあ、た人達に、  
 早く元の生活に戻、てほしいと思ひます。そ  
 のために、今、福島で発電している、農産業  
 を続けていき、新たに産業を取り入れていく  
 ことが大切だと思ひます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙  
氏名 遠藤 海也 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹 中学校

ぼくは、2年生の時に、東日本大震災にあ  
 いました。最初は学校において自分死んどし  
 まうんじゃないかなあと思  
 ったんですけど、でも、先生の指示で外に出  
 たらびしんがとまって少しだけ気持ちがおち  
 ついたけれど、周りの友達は泣いてしま  
 っていてそのせいで、自分も、またこお  
 ってしまったんです。でも少ししたら、おは  
 ちゃんがおかえりきてくれてすごく安心  
 することがとってもできました。

家に帰ってテレビをつけたら福島県はそ  
 んなにかいかなかったけれど、他の県の人  
 りは津波がきたりして家がボロボロにな  
 っていて自分の家があるだけで、とってもあ  
 わせなんかなあと感じました。これからは、  
 びしんがいつきてもいいようにそなえて、い  
 々できる対策をしるかりとってほしい、今  
 後も困まらないうちじゃないかと思っ  
 ています。もう二度とおこらないのをいっ  
 けています。



「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

## 匿名希望

ぼくは、東日本大震災のが起きた日は、そ  
 ろは人じゅくにいきました。地震が起きた時は  
 何が起こったのかが分かりませんでした。  
 回りの家のがわらがくずれ落ちてとてもお  
 がったです。あの時何も思、たかは忘れてし  
 まいました。その次の日から、まず、家の  
 落ちた、かわりも一枚一枚運んで片けをした  
 り、家の中もきれいにしたりました。日本  
 中を見ても、津波で家が流されたり、家が無  
 くなり、避難所で暮らしてたりしていまし  
 ました。悪い事はかりでした。今、思うともう二  
 度とあんな目にはなりたくないと思いました  
 。この東日本大震災で七な、た人もたくさん  
 いました。この東日本大震災では命の大切さ  
 と、助け合う心を学びました。ぼくはあのと  
 きの経験を生かして生きていきたいです。ま  
 た七な、た人の分も命を大切に生きていき  
 たいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 菅野辰子

年齢 12歳

職業

学校名 天吹中学校

ぼくは、東日本大震災がおきたときに学校の帰、とるとちゅうへした。それを学校のバスに乗、とるといきなりバスがとま、とになかなと思、たらいきなりつれたのでおどろきました。そして地震が収まったのでまたバスが走るとタンクみたいなのがおれへいました。それを家につくとぼくのお姉ちゃんか泣いていて、何でかなと思、たら家のがうすかほとんどわれていて、階段が少し有なゆ、とりました。それを家はとうぶんすぬなけの家の前にあ、たバスにすむことになりしました。そしてその日はず、とバスに行きました。でもお父さんとお母さんはず、と夜までどこかにいてとりました。その日の夜は家からふしんを持、とりました。震災からもう6年くらいたちます。家は地震でこわれたところはもう大体直り終わりました。でもと、かにはまだ地震のえいきょうでこわれたところが全部は直してないと思うので早く直るといいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 菊地 広大 年齢 13歳 職業・学校名 知吹中学校

ぼくは、東日本大震災を体験して感じたこ  
 とがあります。それはぼくが小学二年生の時  
 でした。帰りの会をやる前で、ぼくは、机の  
 下にすわり、ランドセルに、教科書を入れ  
 ている時でした。そしてらにもなり、教室に  
 ある、植きバチや、みんなの机がゆれてゆれ  
 てぼくは、何が何んだかわからなくなって退  
 却してしまいました。でも先生の指示にした  
 がって校庭に出て、みんなが泣きながら、親  
 の向かいをまわっているのをぼくは、今でもお  
 れることはありません。  
 ぼくは、災害のあった所が一日でも早く  
 復興してほしいと思っています。復興するた  
 めには、一人一人、ぼくたちの力も必要だと  
 思っています。大きな被害にあった人たちはとて  
 むくるしと思いをしたと思います。ぼくは、  
 そんな人たちの思いを感じながら生きて、  
 命を大切にしたいと思っています。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 小飯田 凌芽 年齢 13 歳 職業 学校名 矢吹中学校

東	日	本	大	震	災	の	と	共	ぼ	く	は	二	年	生	の	最	後		
で	し	た	東	日	本	が	起	こ	る	前	に	地	震	が	夕	か	た		
の	で	こ	わ	い	な	あ	と	思	っ	て	い	ま	し	た	ぼ	く	は		
地	震	が	お	こ	っ	た	と	寒	に	お	ば	あ	ち	や	ん	の	家	に	
ま	し	た	そ	の	と	も	の	こ	と	は	鮮	明	に	覚	え	て	い	ま	
す	発	生	時	刻	は	二	時	四	十	六	分	で	お	ば	あ	ち	や		
ん	の	家	の	天	井	と	壁	が	は	が	れ	落	ち	て	き	て	縦	や	横
に	ゆ	れ	て	す	ご	い	大	地	震	だ	と	び	っ	くり	し	ま	し	た	
自	分	の	家	に	帰	っ	たら	食	器	棚	が	た	お	れ	て	い	て		
自	分	の	部	屋	に	行	っ	たら	ド	ア	が	開	か	な	く	な	る	く	
ら	い	ベ	ッ	ト	が	ふ	さ	い	で	い	ま	し	た						
あ	の	一	日	の	こ	と	で	多	く	の	人	が	悲	し	み	悔	え		
で	放	射	線	で	苦	し	み	で	せ	る	人	た	ち	が	い	ま	す	ぼ	
く	の	方	は	海	が	遠	い	の	で	津	波	な	ど	の	心	配	な	い	の
で	す	が	い	わ	き	市	の	方	で	は	津	波	が	ま	て	多	く	の	命
が	あ	の	大	地	震	で	失	な	わ	れ	ま	し	た	ぼ	く	は	復		
興	へ	の	活	動	は	見	近	な	募	金	ぐ	ら	い	し	か	で	ま	か	せ
人	が	こ	れ	か	ら	も	東	日	本	大	震	災	を	忘	れ	な	い	よう	
に	し	た	い	て	す														

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 鈴木光太郎 年齢 13 歳 職業 学校名 矢吹中学校

僕が震災も、体験したのは、二年生の時  
 した。それは、とてつもない地なりととも  
 始ま。て、少しづつゆれきてPがて大きな  
 物に変わりました。すぐ机の下に隠れ泣きえ  
 うになりながら、地震がPむのを、まちまし  
 た。PがてPむとドアから次から次えと外に  
 逃げ出していきました。外で並んでま。こい  
 る時も予震が何度も何度も繰り返し襲、てま  
 きました。そして家への帰り道も心配しながら  
 帰りました。その夜は、予震がPまなくて、  
 車の内で寝おりました。そしてニュースでは  
 つなみが町を、のみこむ物ばかりでした。つ  
 なみで家族がながされた人が泣いている影像が  
 いる。ばいありました。その後も復興は、進ま  
 ずに、原発事故も起きました。小さなか。た  
 僕にでもこの大事には、おちついていらま  
 せんでした。いもこの経験も、かてに未来に  
 は、このような被害も、出さないようにかん  
 ば、してほしいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 小川俊羽

年齢 13 歳

職業・学校名 矢吹中学校

震災がおこったのは、ぼくが小学二年生の  
 ときでした。ぼくが震災のときはおこした体  
 験をたまたまを話します。地震は二〇一一年の  
 三月十一日の二時四十六分でした。その日ぼ  
 くは、かぜをひいて学校を休んでいました。そ  
 の頃は習字を習っていて習字塾に行く所でし  
 ました。でもそのときいきなりテレビから変な音  
 が鳴ってお母さんが地震が来る音といって下  
 へひなんしました。そしてぼくは外へにげよ  
 うとしたが、お母さんがテレビをおさえてとい  
 っておさえました。すごくこおかったです。  
 続いて今の状況は、まだデコボコしてる道路  
 がガレキがたくさんあります。

震災当時は水がガスも使えなく食べるもの  
 も少なくて不自由な思いをしました。今  
 は、あたり前のように水がでておいしい食べ  
 物も食べる生活があることに感謝して、ぼ  
 くたちが体験した震災を、次の世代に伝えて  
 いきたいと思ひます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 星 優希

年齢 13 歳

職業・学校名 矢次 中学 木交

僕が小学校二年生のころに、大地震が来ま  
 した。それが「東日本大震災」です。  
 大地震が来る前まで帰りの会をやっていて、  
 最後に「さようなら」と言、た。大地震が起  
 きました。みんなは、机の下に必死でかくれ  
 たりしてました。その後、外に避難し、コン  
 クリートがあたりしました。そしてみんな  
 の親が迎えに来て、僕も帰りました。  
 学校から帰るとき、道路がへこんだり盛り  
 上か、たりしてました。家に帰っても余震  
 が続きました。そしてセブンやローソンの品  
 がたなかから落ちていました。ガソリンスタン  
 ドでは車がい、げいあり、混雑うしていまし  
 た。  
 けれども東日本大震災から約一、二年経、  
 た頃、町の人々で、矢次町で「復興祭」な  
 をやりました。そして、復興祭に「春蘭がー  
 ルズ」というアイドルがあり、復興祭にと  
 びました。復興して僕はよか、たと思いまし  
 た。





「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 吉田翔海 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

東日本大震災という体験をして思ったことは二つあります。一つ目は、水などの大切さです。ふだんの日常ではふつうに使えるものでも、このような震災のときはそのようにはいきません。なのでふだんから水をムダづかいしないで節約を心かけて生活していくことが大切だと思いました。二つ目は、人と人との助け合いの大切さです。地震などの災害のときは、みんな困っています。僕の家では、水が出なくなりましたので、近所の人に水をもらいにいったことがあります。このように困っている人をしっかりと助けられるように僕も生活していきたいと思いました。そして福島県は今たいぶ復興してきています。それは他の県の協力があってからだと思います。だから今度他の県で災害があったときは募金などに積極的に参加したいと思いました。このように日々の日常のありがたみを知れたので毎日を大切に過ごしていきたいと思えます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 吉成 一貴 年齢 13 歳 職業・学校名 矢吹中学校

僕はこの震災のことは忘れたいと思います。  
 車で街を走ると今まで見たことが無い  
 光景が、目に入ります。起きたからです。今までど  
 く普通に建つ。こいたはかの建物か、くかたこ  
 たり。今まで平た。た道路か地割れして、  
 びこぼこにな。こいたりするのです。僕は  
 最初は確かなゆれは大きか。たけど、こんか  
 にな。こしまうとは思。こいませんこした。  
 こして、この地震で多くのことを学びました。  
 まか地震とこいう言葉を知らなか。たこの僕に、  
 地震の恐ろを教えてくれました。こして僕は  
 このことから一つ良か。たと思えることかあ  
 ります。それは地震を知らなか。たのて何か  
 おきこいるのか分からずに、何かによ。こけ  
 かをこしてしま。たかもしれません。たのて、  
 これば、後世にほし。かりたえたいとこいけな  
 いとこいうことも分かりました。しかも、僕は  
 その時に2年生だ。たのてこの世から伝えな  
 いとこいけないうことを深く学ぶことかこ  
 きました。